

線維細胞の関与解明

がん治療薬への耐性



西岡安彦教授

徳島大の西岡安彦大
学院教授(呼吸器内科
学)らの研究グループ
は、肺がんや大腸がん
の治療薬「血管新生阻
害薬」を使い続けると
薬が効かなくなる現象
に、骨髓からできる線

血管新生阻害薬は、
がん細胞に栄養を供給
する血管の形成を妨げ
ることで、がんを小さ
くするが、薬を使い続

維細胞が関わっている
ことを突き止めた。阻
害薬の効果を持続させ
ることにつながる発見
で、4日付の英科学誌
「ネイチャー・コミュニ
ケーションズ」電子版に
発表した。

徳島大 新治療法開発に期待

けると耐性ができて効
果がなくなる。耐性が
できる原因の究明が課
題だった。がん患者の
がん組織を調べたところ、
マウスと持たないマウ
スを用いて実験。耐性
を持つマウスの体内で
は血管を作る因子「F
GF2」の量が耐性の
ないマウスの3倍近く
に上り、FGF2が耐性
の原因と判断した。がん
に苦しむ多くの患者を
救う創薬につながる
「FGF2を出しなげ
てほしい」と話している
細胞が何かを研

究した結果、線維細胞
と分かった。がん患者
の組織を調べたところ、
マウスと持たないマウ
スを用いて実験。耐性
を持つマウスの体内で
は血管を作る因子「F
GF2」の量が耐性の
ないマウスの3倍近く
に上り、FGF2が耐性
の原因と判断した。がん
に苦しむ多くの患者を
救う創薬につながる
「FGF2を出しなげ
てほしい」と話している
細胞が何かを研

究した結果、線維細胞
と分かった。がん患者
の組織を調べたところ、
マウスと持たないマウ
スを用いて実験。耐性
を持つマウスの体内で
は血管を作る因子「F
GF2」の量が耐性の
ないマウスの3倍近く
に上り、FGF2が耐性
の原因と判断した。がん
に苦しむ多くの患者を
救う創薬につながる
「FGF2を出しなげ
てほしい」と話している
細胞が何かを研